



旭水会主催の卒業を祝う会が開催

本学部同窓会である旭水会の主催で卒業を祝う会が3月21日、ビューホテルにて開催されました。卒業生・修了生145名、大学教職員32名、旭水会関係者など、総勢230名程度が参加し、盛会でした。

これまでは、駅にも大学にもほど近い秋田県民会館で卒業式が行われてきましたが、県民会館が新築工事中のため、秋田市立体育館で卒業式が行われました。卒業生はバスで移動することになり、卒業を祝う会への参加が少なくなるのではないかと予想されました。また、卒業論文の提出先が学務になったため、提出時に旭水会への入会や卒業を祝う会への参加を直接呼びかける機会が減ってしまいました。しかし、さまざまな取り組みのおかげで盛会となりました。

千葉昭旭水会会長の開会挨拶、山本文雄学長と佐藤修司学部長からの祝辞、学校教育課程堀俊介さんと地域文化学科小綿叶さんからの卒業生代表挨拶、最後の万歳三唱まで、歌あり、なまはげありの楽しい会となりました。卒業生挨拶の中身については、今後、旭水会報に紹介される予定ですので、ご覧ください。

今年度は、大学教員と卒業生に対して、この旭水会、同窓会、卒業を祝う会の意義を訴える機会（本情報誌やスタッフメール、アネット、教授会など）を何度か持ちました。また、秋田市役所に加えて、秋田県庁にも同窓会組織を結成していただくなど、学校教員になる卒業生だけでなく、公務員や企業人になる卒業生にとっても、同窓会がその支えになるように取り組んできました。

さらに、卒業を祝う会の卒業生代表挨拶は、従来、学校教員になる卒業生一人が務めることが多かったことを改め、学校教育課程と地域文化学科のそれぞれ一人ずつに挨拶をしてもらうことにしました。加えて、学生協議会の学生代表と副代表、いずれも3年次の学生に、受付等のお手伝いも含めて、参加してもらいました。テーブルの配置にも工夫をこらして、学校教育課程と地域文化学科の卒業生がうまく配置されるようにしました。

2年前、2017年3月までは、卒業生が290名程度いたものが、学部改組によって2018年3月の卒業生からは210名程度に減少しています。それだけに、卒業生と同窓会とのより親密な関係を作り出し、同窓会の一層の発展を目指すことが求められます。



卒業生代表：堀 俊介さん



小綿 叶さん





【学部長祝辞】

これから多くの皆さんは社会に巣立ち、独り立ちしていくことが求められ、期待と同時に不安にかられるところも多いと思います。しかし、同時に、これまで皆さんが受けてきた支援に感謝することも忘れないでください。保護者の方からの支援はもとよりですが、これまでの学校の中で出会ってきた教職員の方々の支援もありました。また、みなさんの学びは多額の税金によっても支えられたわけですので、社会全体によって支えられてきたと言っていいでしょう。

その「恩返し」は、親孝行として親御さんに向けられることもあります。私自身も含めて、親としては、皆さん自身が幸せであって、これからの人生を楽しんで生き生きと送ってくれることの方が本当に親孝行なことだと感じます。同時に、その「恩」は、これから皆さんが出会うことになる多くの人々に対して返してほしいとも思います。学校の教師になる人であれば、子どもたちでしょう。公務員であれば、地域の住民の方々、企業人であれば、その製品やサービスを購入する消費者の方々でしょう。それらの人々の幸せのために尽くすこと、特に社会的に不利な立場に置かれている人たちのために尽くすことが重要です。「恩返し」が世代を超えて受け継がれ、地域を越えて広がっていけば、世の中はもっと住みやすい、温かなものになるに違いありません。優しさや慈しみは与えて減るものではなく、分け与えるほど、分かち合うほどにさらに豊かに、大きくなっていくものです。憎しみや怒りも逆の意味で同様なように思います。憎しみや怒りは周りの人を巻き込んで、不幸を拡大してしまいます。

みなさんが大学、大学院までまっとうできたのは、みなさんの努力や才能もあるかもしれませんが、みなさんの恵まれた環境によるところも大きいのではないのでしょうか。そのような環境に恵まれない人々が日本にも、世界にも多数存在しています。むしろ、恵まれている人の方がはるかに少

数でしょう。自らの責任ではなく、たまたま生まれ落ちた環境によって、人の幸せや不幸せが決まるのだとすれば、これほど正義に反することはありません。憲法によって平等に権利や自由が保障されていても、それを本当に享受し、自分のものにするのは難しいのです。皆さん方が、自分は恵まれていたと思うのであれば、その環境の中で得られた能力を、様々な困難の中にある人々のために使ってほしいと願います。

みなさんが何かをするときに、それが自分のためであれば、諦めるのも自己責任ですむかもしれませんが、しかし、困難な中にある人々のために仕事や活動をするのであれば、簡単に諦めるわけにはいかないでしょう。みなさんの力や支えを必要としている人たち、待っている人たちが世の中にたくさんいるに違いありません。みなさんが困難や不安を感じたとき、ぜひ視点を自分の内側ではなく、自分の外側に向けるようにしてほしいと思います。そして、どんなに困難な状況にあっても、何かやれることはないか、それを探ってください。その時はつらくても、あきらめなければ、必ず道は開けるはずです。出口の見えないトンネルでも、歩み続ければ出口は必ず見えてきます。



第 70 回日本ハンドボール選手権大会に出場

教育実践コース 2 年次 村山 倫太郎

平成 31 年 1 月 29 日（火）より熊本県山鹿市で開催された平成 30 年度第 70 回日本ハンドボール選手権大会に男子ハンドボール部が出場しました。この大会には各地区の予選を勝ち抜いてきたチーム、インターカレッジにおいて決勝進出を果たした 2 チーム、そして、日本国内最高のリーグ JHL（日本ハンドボールリーグ）の全チームが参加する。文字通り日本のトップチームが参加する大会です。私達男子ハンドボール部はインターカレッジに出場することはできませんでしたが、秋田県予選、東北予選を突破し、出場権を獲得しました。

一回戦は関東代表の甲府クラブとの対戦でした。前半は先制に成功するも、お互いに得点を重ね、一進一退の攻防が続きます。前半終了間際に 3 連続得点に成功し、前半は 3 点リードして終了します。後半もお互いの力が拮抗し、緊迫した攻防が続きます。後半も終盤に差し掛かると、相手のミスが増え始め、その好機を見逃さず連続得点で 6 点のリードを奪いました。しかし、相手の反撃にあい、1 点差に縮められるも、そこで試合終了。29-28 で甲府クラブを破り、二回戦へとコマを進めました。

二回戦は JHL の北陸電力ブルーサンダーとの対戦でした。前半は JHL の力強いプレーに押され、リズムを作ることができず、終始ゲームを支配されてしまいました。しかし、後半はディフェンスをより積極的にすることで、相手のミスを誘い、立ち上がりの主導権を握りました。その後もディフェンスの足を止めることなくプレーし、互角の展開に持ち込みました。そして、ここまでチームを引っ張ってきた 4 年生の主将・堀の 3 連続得点で後半のスコアでは 1 点リードし、試合終了のブザーが鳴りました。23-36 で負けてしまいました。悔いの残らない良い試合でした。

来年度はインターカレッジ、日本選手権どちらにも出場できるようなチームを目指し、日々努力していきます。応援ありがとうございます。



教育実践コース 2 年次 木立 智大

秋田大学ハンドボール部は全日本学生ハンドボール選手権大会の出場を目指し、日々練習に取り組んでいます。今年度のハンドボール部は、東日本インカレではグループ 2 位、秋季東北学生リーグでは 3 位と、目標であった全日本学生ハンドボール選手権大会の出場には届かず、悔しさが残る結果となりました。その悔しさもあり、秋季リーグが終わった 10 月から、4 年生も部に残り、全日本選手権出場を目指し練習し、見事に全日本選手権の出場権を勝ち取ることができました。私自身、1 年生ながら秋田県予選、東北予選ともに出場する機会をいただき、本戦である全日本選手権でも試合に出ることができました。今回の大会を通して、このような経験をさせてくれた 4 年生をはじめとする先輩方に感謝するとともに、自分の実力不足を感じることができました。今大会は、大学生だけでなく、社会人チームや、実業団チームも出場しており、違う環境や年代の人たちとプレーしたことで、今後自分がどのように成長していくべきか、どのようなものが足りていないのかを実感することができました。大学 1 年生の今、このような経験ができたことは、本当に恵まれていると感じました。今大会の経験を生かし、新チームとなった来年度には、全日本学生ハンドボール選手権大会に出場できるよう、日々の練習に取り組んでいきたいと思います。

教育実践コース 2 年次 熊谷 晟和

今回このように全日本選手権という大きな舞台に選手として立つことができたのはとてもかけがえのないものです。私は国立大学でもハンドボールを通して高みを目指せるこの大学を選び入学しました。入学 1 年目からコートに立つ経験をたくさんさせてもらい、全国でプレーすることができたのも先輩方や監督の先生のおかげです。勉強と部活の両立できるこの大学で、さらに上を目指し再び全国の舞台で戦いたいと思います。応援してくださった皆様本当にありがとうございます。これからも何卒よろしくお願い致します。

教育実践コース 2 年次 佐藤 光

今回は先輩達のおかげで貴重な体験をすることができて良かったです。昨年出場することのできなかったインカレに出場できるよう日々の練習を頑張りたいと思います。また、2 年連続、全日本総合にも出場できるよう頑張りたいと思います。応援してくださった皆様ありがとうございます。

能代市役所・秋田大学：「白神ねぎ」に関する研究等成果報告会

2019年2月21(木)、能代市役所にて表記の報告会が開催されました。学生の成果報告の後、能代市長その他の出席者の方から講評をいただきました。

2018年度、能代市から秋田大学が受託した事業は、第2次能代市総合計画に掲げる重要課題の解決につながる、「モノ」や「コト」を開発するというものです。その中で今回は、能代市の特産品である「白神ねぎ」に着目し、2018年5月から秋田大学教育文化学部地域文化学科3年次の学生9名が能代市での現地調査(9月10日、11日)も行い、「白神ねぎ」のPRとまちづくりへの活用について、取り組んできました(教育文化学部地域文化学科の教員2名：荒井壮一(経済学)と和泉浩(社会学)が指導)。

教育文化学部地域文化学科の「特定地域研究ゼミ」という授業(地域文化学科の教員が複数の講

座を開講し、さまざまな地域について調査・研究する授業)の一環として実施しました。

学生9名が2つのグループに分かれ、①「白神ねぎ」を活用したまちづくりの提案書、②「白神ねぎ」紹介パンフレット、③就農支援事例集を作成しました。

2017年度に能代市から秋田大学が事業を受託し、第2次能代市総合計画策定のための総合計画市民協働会議(計7回)に地域文化学科3年次の学生5名が学生サポーターとして参加しています。荒井壮一が市民協働会議の主アドバイザーを務めました。2017年度の事業に引き続き、2018年度も事業を受託・実施し、来年度も継続予定です。秋田県内の自治体と秋田大学との連携の取り組みの一つとして貴重なものになっています。

受託事業成果物(予定)

	第1グループ	第2グループ
学生名	村山 健二(リーダー)、 高橋 優佳(副リーダー) 大澤 哀、小野寺 幹、類家 陽平	工藤 拓哉(リーダー)、 佐藤 竣亮(副リーダー) 富谷 咲和、野村 春乃
白神ねぎに関する提案書	需要が伸びているにもかかわらず、農家の人手不足の問題があり、それにたいして、他の自治体の取り組みなどを参考に、情報の公開と、新規就農者への農業支援と生活支援をパッケージ化して提供する案を提案	ねぎ生産の人手不足の問題にたいして、外国人労働者・青年未就労者等の積極的な雇用、就農支援の年齢制限の変更、JA間の連携による通年雇用(アルバイト「リレー方式」)、農コン(婚活)、宣伝活動の改善、地元生徒への広報を提案
パンフレット	・観光客向けのパンフレット案 ・就農に関心を持っている人向けのパンフレット案	・観光客向けのパンフレット案 ・地元高校生等向けのパンフレット案
事例集	就農支援政策事例集	

白神ねぎに関する取り組みを振り返って

地域社会コース 2019年3月卒業 村山 健二

今回の活動で思ったのは、人口減少が問題視されるようないわゆる活気のない地域にも魅力的な商品や文化が隠れているということだ。正直に言うと、私はこの活動を始めるまで「白神ねぎ」というものの存在を知らなかった。当時は秋田に住み始めて3年目で、学科の性質上秋田の名産品についても調べたことはあったが、白神ねぎを取り扱うと聞いたときもピンと来なかった。さらには能代市についても特段のイメージはなかった。しかし調べ始めると、農家の方々の努力によって品質も向上し、売上也順調に伸びていることがわかった。

一方で調査をすればするほど、意外にもその魅力や売上向上の実態が伝わりきっていないようにも感じられた。友人に白神ねぎについて尋ねても「能代はねぎで有名ならしい」という程度の認識で、スーパーでのアンケートの際でも「能代ねぎ」と「白神ねぎ」の違いがわからない人が多かった。こんなにも有力な商材があり対外的には好調かもしれないが、地元での正確な理解や自信、誇りのようなものが醸成さ



れることが白神ねぎのさらなる発展には必要だと感じた。やはり地元の基盤が大切だ。これは農業者の獲得にも繋がるだろう。

新規就農者獲得に向けた政策を考える中で、各地の先行事例を調べた。その中で感じたことは、日本全国どこでも同じことで悩んでいて様々な取り組みを行っていることだ。それだけ人口減少に伴うこれらの問題が深刻だと感じるとともに、政策に各地の特色がよく出ているように感じた。現代はダイバーシティの時代だとよく言われるが、これは個人だけでなく自治体においても同じことが言えるのだろう。新規就農者支援政策について言えば興味を持つよう様々な工夫された Web サイトや、他の地域に無いサービスで人手を得ようとしている。このように地域の色を出すため、行政の担い手はこれまで以上に地域の特色や実態を理解していく必要があり、いわゆる「お役所仕事」では不足になっていくだろう。私も将来は地方行政に携わることを目指している身として、何が求められているのかを考え直すいい機会になった。

特定地域研究ゼミを終えて

地域社会コース 2019 年 3 月卒業 工藤 拓哉

私たちは今年度、能代市が現在生産・販売に力を注いでいる「白神ねぎ」に注目し、さらなる生産拡大・PR に向けての課題や、能代市の活性化に繋げるための政策案について調査・研究してきた。そして先日、能代市役所において、政策提案等の研究成果を能代市長はじめ多くの関係者の方々にプレゼンテーションにて報告し、今年度の全活動を終了した。

私は「白神ねぎ」の存在をこの講座が始まってから知ったのだが、当初は「現在白神ねぎが販売額 10 億円を達成している」といった目に見える事実しか分からず、具体的な白神ねぎ産業の課題を明確に把握できずにいた。そのため、これをどのように「能代市の活性化」というゴール地点に持っていけばよいものか、班内でも悩みながらの研究活動だった。

しかし、昨年 9 月に能代市に足を運び、能代市ねぎ課・JA あきた白神への訪問調査や市内スーパーマーケットでのアンケート調査を通して、白神ねぎ産業の「生産における人手不足」と「知名度不足」という 2 側面の課題に焦点を絞ることができた。私たち 2 班はこの 2 側面の課題に対する政策提案をするという軸が定まり、その後の調査研究を経て最終的に様々な政策提案を能代市に報告することが出来た。

私は今回の活動を通して、白神ねぎのように何か一つの産業に着目して研究することは、地域活

性化のために重要なことなのではないかと考えさせられた。

例えば私たちは人手不足に関して、県内の JA が連携し、農作業のアルバイトを地域間リレー方式で雇用することを提案したが、JA 間の連携は県内の農業全体での協力に繋がり、能代市にとどまらず、秋田県全体の農業面からの地域振興を考える足掛かりになるかもしれない。また、広告活動を促進するために、例えば白神ねぎを PR するイベント案を考えれば、それはすなわち人を呼び込む催しを企画することに直結するため、地域活性化において重要な「交流人口の拡大」というテーマにもアイデアを繋げることが可能になる。

このように、その地域の何か一つの産業、一つの強みを深く掘り下げて様々な方向から課題について検討することは、結果として地域全体の活性化案を模索することに繋がるという点を、私は今回の活動を通じて学んだ。また、私自身これまであまり経験してこなかった、フィールドワーク・アンケート調査・聞き取り調査などを本格的に実践してみて、調査研究において具体的なデータを事細かに収集することの大切さを実感した。

私は卒業後、秋田市の職員を目指しているが、地域振興に最前線で取り組む職員を目指す者としてこれらの経験はおおいに意義のあるものとなった。

差し当たって今年は、卒業研究などを控えているため、今回学んだ調査・研究のスキルなどを生かしたいと思う。



若山牧水青春短歌大賞を受賞して

人間文化コース 2019 年 3 月卒業

私は第 19 回若山牧水青春短歌大賞において、一人にはしないでください

街中の非常用ボタンを押しそうだから
という短歌で大賞をいただきました。過去にも応募したことがある大会ですが、大賞をいただいたのは初めてのことで、受賞の連絡をいただいたときは驚くと同時にとても嬉しく感じました。

授賞式は 3 月下旬に宮崎県延岡市で行われました。私は大学生等及び一般部門での受賞でしたが、その他にも、小学生部門・中学生部門・高校生部門と年齢ごとに部門が設けられている大会だったため、授賞式には幅広い年代の方々がいらっしゃいました。ここまで幅広い年代の方々と一度に接する機会は滅多にないため、ここに出席している人々が皆短歌に親しんでいるのだと思うと、胸が躍りました。受賞作品についての講評も式の中でいただいたのですが、私の短歌については、「切実な寂しさと、どこか童話を読むような懐かしさが感じられる」「だからの理由付けが唐突で、しかし迫力がある」と評していただきました。詠んだ短

加藤 菜々

歌に対して客観的な評価をいただく機会や、直接目の前で講評をいただく機会は少ないため、今後の糧となる貴重な経験となりました。

私は個人での参加でしたが、ご家族や学校の先生方が付き添いとしていらっしゃる受賞者の方も多く、会場は賑やかな雰囲気でした。なにより審査員の先生方や延岡市の方々がたいへん温かく親切で、緊張している私に優しく声をかけて下さり、それがきっかけとなって、たくさんの方々とお話をすることができました。私は普段一人で短歌を詠んでいるため、狭い世界の中での活動ですが、今回の大会で短歌に親しむ様々な年代や価値観の人々とお会いすることができ、多くのものを得たことで、短歌に対する想いがより深まりました。今後も一層短歌活動に励んでいきたいと思っています。



「平成 30 年度文部科学大臣優秀教職員表彰」を受賞

秋田大学教育文化学部附属中学校の花田守教諭が、「平成 30 年度文部科学大臣優秀教職員表彰」を受賞しました。文部科学省では、学校教育における教育実践等に顕著な成果を上げた教職員や教職員組織についてその功績を表彰しており、花田教諭は学習指導において特に顕著な成果を上げた者として、実践分野「学習指導における特に顕著な成果」での受賞となりました。花田教諭は、現在、研究主任を務めており、「共に未来を切り拓く

開かれた個々～批判的思考力を高める学習活動の工夫」をテーマ

とした教育実践の旗振り役として、持てる力を存分に発揮して学習指導に当たっています。

1 月 30 日には花田教諭、原義彦附属中学校長が本学の山本文雄学長を訪れ、受賞を報告しました。

写真は左から原校長、花田教諭、山本学長
【秋田大学HPより転載】



附属小学校で学長による講話を実施

秋田大学教育文化学部附属小学校は 2 月 22 日、同校の 6 年生を対象に本学の山本文雄学長による講話を行いました。この講話は卒業を間近に控えた 6 年生を対象に、山本学長の講話を聞くことで、児童たちにより高い志、進学への希望をもってもらうことを目的に開催しました。

山本学長は自身の専門分野である心臓血管外科学をテーマに「心臓の話」と題して講演し、心臓のしくみや病気などについて画像や動画を用いてわかりやすく紹介しました。最後に、「みんなは将来

何になりたいですか。どんな職業でもいいので、社会の役に立つ大人を目指してください」とメッセージを送り、児童たちは山本学長の専門的な講話に真剣に耳を傾け、自分の将来を考えるための有意義な時間を過ごしました。おわりに、同校の成田雅樹校長が挨拶をして会を閉じました。

【秋田大学HPより転載】



第1回心理実践フォーラムを開催

3月10日(日)、10:00～12:00、60周年記念ホールにおいて、表記のフォーラムを「再犯防止教育と心理支援～塀の中の“教育”」と題して開催しました。県内外から70名程度の方が参加しました。法務省からは大臣官房審議官大橋哲様、矯正局更生支援室長山本宏一様、仙台矯正管区からは第一部長岡本昌之様外2名、秋田刑務所からは所長笹田泰弘様、総務部長田代憲彦様、処遇部長大川和彦様外9名の方に参加いただきました。



大橋哲
審議官 (左)

山本宏一
室長 (右)



このフォーラムは、2018年2月8日に、本学部と秋田刑務所とが連携協定を締結してからほぼ1年になることを記念して行われました。2018年4月から地域文化学科に心理実践コースが誕生し、公認心理師養成がスタートしました。その実習先として秋田刑務所が加わったこととともに、刑務所等での矯正行政に大学としても貢献することが求められます。すでに刑務所と連携を積み上げてきている北島正人准教授が中心になってフォーラムが企画されました。



笹田泰弘
刑務所長

講演では、①「塀の中に“教育”が導入されるまで―再犯防止指導の歴史と意義―」草薙弘行(秋田刑務所主席矯正処遇官(処遇担当))、②「罪を犯した人たちと向き合う仕事」山本宏一(法務省矯正局更生支援室長)、③「窃盗・詐欺事犯者の再犯防止指導」小番崇央(秋田刑務所教育担当刑務官)、④「薬物依存事犯者の再犯防止指導」後藤亘(秋田刑務所教育専門官)、⑤「再犯防止における心理学的支援」北島正人(本学教育文化学部准教授)、が行われました。

感想

心理教育実践専攻2年 仙北屋歩実

刑務所に関する講演を聴かせていただくことは初めてで、とても貴重な時間でした。私は、犯罪被害者支援に関心があり、警察のボランティアに参加しているのですが、犯罪加害者に対しても、臨床心理士としてどのような関わりができるのかと考える機会になりました。刑務所の専門プログラム受講者の感想の中に、心理の先生の説明がためになった、自信を持つことができたというものがあり、感銘を受けました。

以前NHKの番組の中で、窃盗について、自力で生計を立てることが難しいためつい盗ってしまうという話がありました。番組では、生計を立てることが難しいという生活環境に着目していました。講演を聴き、心理学の視点から、罪を犯すという行動が起きる仕組みを理解することの重要性を学びました。加害者は一般的に「悪いヤツ」というようなイメージを持たれやすいというお話もありましたが、内面の仕組みや周囲の環境に注目し、双方向的な教育を行うことが効果的だと感じました。そのような教育の方法が広がると、犯罪をしてしまう人も被害者も減ることにつながると思いますし、私も支援する立場として考え続けていきたいです。



草薙弘行 主席
矯正処遇官
(左)

小番崇央
刑務官
(右)



後藤亘
教育専門官 (左)

北島正人
准教授 (右)



心理教育実践専攻 2019年4月修了 菅原麻衣
今回のフォーラムでは、刑務官や教育官の方々から、普段は知ることのできない受刑者の再犯防止指導について学ばせていただきました。講演の中では、実際に指導している場面の動画があり、その中では受刑者の方々も真剣に話を聞き、自分の意見を述べている場面もありました。受刑者の方が刑務官の前でも臆せず自分の意見を言う様子を見て、この指導の場は受刑者にとって、自分がきちんと尊重される場であり、出所後も自分を大



切にできる方法を学ぶ場として向き合っているのだと感じました。

現場で指導に携わる方々は、受刑者を「受刑者」という色眼鏡をかけずに一人の「人間」として真摯に向き合い、再犯防止についてお互いに話し合いながら考えていくという指導をされているのがわかりました。社会も受刑者本人も、「受刑者」という先入観から様々な偏見や諦めを持つことがあ

りますが、そうした先入観が本人の変わる機会を失わせているのだと考えました。

秋田なまはげの会 佐藤繁子さん（一般）

フォーラムではカルチャーショックを受けた感じでした。受刑者とのやり取りのなかに笑いがあるなど想像もしませんでした。そして刑務所の方々の職務に対する姿勢に心打たれました。

定年退職等教員を送る会を開催

3月5日の教授会・研究科委員会の後、17:30より大学会館2階にて、毎年恒例の「定年退職等教員を送る会」を開催しました。例年になく出席者は多く、30名ほどの方の参加があり、退職予定の阿部先生、川東先生、佐藤靖先生にご出席いただきました。秋田県内外の多くの地酒の提供がありました。

佐藤修司学部長の挨拶と退職される方の紹介の後、佐々木和貴副学部長の乾杯を行いました。しばらく歓談の後、退職者からのご挨拶、さらにしばらくしてからつながりの強い方からの思い出話などがあり、非常に楽しい、なごやかな会となりました。最後に林良雄副学部長の中締めの乾杯でお開きとなりました。

また、就職情報室の村上勝子さんもご退職となりました。みなさんには長い間、本学、本学部のために活躍していただいたことに深く感謝いたします。退職者の皆さんは、引き続き特別教授や非常勤講師として残られる方、他大学へ転出される方もいらっしゃると思いますが、新たな環境においても元気で活躍されることを祈念しています。



退職されるみなさんの秋田大学での在職期間と務められた主な役職を記載しておきます。

【定年退職】

阿部 昇 教授（教職実践専攻）

2000年4月～2019年3月（19年間）

附属小学校長、学長補佐、図書館長補佐

勝守 真 教授（国際文化コース）

1987年9月～2019年3月（31.5年間）

川東雅樹 教授（国際文化コース）

1980年4月～2019年3月（39年間）

教育推進主管、学長補佐、地域創生センター長
副学部長・評議員

佐藤 靖 教授（教育実践コース）

1989年4月～2019年3月（30年間）

男女ハンドボール部監督

【退職・転出等】

川村教一 教授（理数教育コース）

2009年10月～2019年3月（9.5年間）

附属中学校長

兵庫県立大学へ

高田屋陽子 准教授（特別支援教育コース）

2017年4月～2019年3月（2年間）

栗田支援学校へ

村上 東 教授（英語教育コース）

1981年4月～2019年3月（38年間）

神居 隆 客員教授（教育実践研究支援センター）

2010年4月～2019年3月（9年間）

教育実践研究支援センター長

村上勝子 事務系スタッフ（就職情報室）

1998年4月～2019年3月（21年間）



退職等辞令交付式（3月29日）にて

第6回あきたの教師力高度化フォーラムを開催

2月28日、「教師力をどのように高度化するか」をテーマに、表記のフォーラムを実施しました。参加者は学外13名を含めて、70名程度でした。



濱田風香さん



小川由佳さん



金澤拓海さん

第1部で、佐藤学教授から、4月発足予定の教職高度化センターに関する説明が行われた後、第2部として、模擬授業フェスティバル決選が行われました。2月21日に行われた予選に出場した6組の中から進んだ3組が模擬授業を披露しました。最優秀賞は「中世武家社会の成立 室町幕府の成立（高校日本史）」を行った濱田風香（授業者）、小笹直也、西田あき子のグループ、優秀賞は「風やゴムで動かそう（小学校理科）」を行った小川由佳（授業者）、工藤唯花、鈴木香春、蒔苗佳奈、茂木瞳のグループ、優良賞は「正負の数（中学校数学）」を行った金澤拓海（授業者）、松崎広希、佐々木隆紀、藤島遼太のグループでした。

教職大学院の学卒院生が司会や児童生徒役を務め、各グループの発表への質問や意見を出し、現職院生がコメントを行う形で、教職大学院の院生が中心的な役割を果たしていました。審査員は佐々木和貴副学部長、林良雄副学部長、三浦亨准教授でした。どれもすばらしい発表で、すぐにでも学校現場で活用・実践できるような完成度の高いものでした。

模擬授業フェスティバルは佐藤学教授を中心に2016年から始まったものです。教科やコース・研究室の壁を越えて学生の交流が生まれることは学生の視野を広げるとともに、学部、学校教育課程の一体性を生むことに役立ちます。また、教員採用試験で模擬授業がありますので、その準備にもなるわけですが、教師力の高度化に向けて、何らかゲーム的、娯楽的な要素を入れることはとても意味があることです。教師力の高度化という教師の力量を向上させなければならない、という義務感ややらされ感、被害者感が伴いがちです。賞罰や損得、不安、恐怖によって外部から強制されたものは決して長続きしません。本当に達成したいと心から思える目標に向かって、楽しいと思えることをやるのが重要です。子どもが授業を楽しんでいると思うためには、教師自身が授業を楽しんでいることが条件になります。力量向上も同じことでしょう。

第3部のシンポジウムでは、鶴飼孝東成瀬村教育長、細川和仁本学部准教授、千葉圭子附属小学校副校長をシンポジストにして、阿部昇本教職大学院教授の司会進行で教師力を高度化するための方策について協議を行いました。

鶴飼教育長からは、東成瀬村における小中連携教育や新年度当初の研修を通して行われている、探究型の授業を基盤とした小中授業研究会・研修会の取り組み、小中の共通実践事項の実践などが紹介されました。千葉圭子副校長からは、附属小学校における研究の日常化や、教え方を教えるための意識改革、公開研などを通じた発信、附属全体を育ちの場と学びの場にしていくこと、働き方改革を推進すること、などが紹介されました。細川准教授からは、授業における「わざ」について、また教職や学校教育の客観視について問題提起がありました。



教育文化学部誕生—学部の歴史をたどる⑩

教育学部が教育文化学部へ改組されたのが1998年4月ですので、すでに20年が経過したことになります。

教育学部 320 名	
幼稚園教員養成課程	20 名
小学校教員養成課程	140 名
中学校教員養成課程	60 名
養護学校教員養成課程	20 名
情報科学課程	80 名



教育文化学部 290 名	
学校教育課程	
教科教育実践選修	65 名
障害児教育選修	15 名
発達科学選修	20 名
地域科学課程	65 名
政策科学選修	
生活者科学選修	
文化環境選修	
国際言語文化課程	65 名
日本・アジア文化選修	
欧米文化選修	
国際コミュニケーション選修	
人間環境課程	60 名
自然環境選修	
環境応用選修	

改組前の教育学部は1年次が320名の学生定員で、小学校教員養成課程の下に各教科副専攻と教育・心理副専攻があり、中学校教員養成課程の下に各教科専攻がありました。養護学校教員養成課程と幼稚園教員養成課程を合わせて240名でした。加えて、いわゆる「ゼロ免課程」「新課程」（教員免許を必修としない、または取らない課

程）である情報科学課程が80名ありました。情報科学課程は1991年に環境情報、社会情報の2コース40名でスタートし、1993年に国際情報、数理情報を加えた4コース80名になります。

新課程は教員採用減に伴い、1980年代終わり頃から全国的に多くの教育大学・教育学部に置かれるようになりました。さらに教員採用数が減少する中、文部省は教員養成課程の定員を5000名削減する計画を立て、さらに新課程が拡大していきます。その結果、1990年代終わりに横浜国立・新潟・山梨が教育人間科学部、福井・鳥取が教育地域科学部、大分が教育福祉科学部、秋田・宮崎が教育文化学部、佐賀大学が文化教育学部へと、教育学部から新名称の学部への改組が行われました。新名称学部の中でも、秋田は教員養成課程の定員が学部定員の3分の1程度となり、全国で教員養成課程の割合が最も低くなりました。秋田大学の改組の前にすでに改組されていたのは佐賀大学文化教育学部だけでした（1996年10月改組）。

本県には人文社会系の国公立の学部が存在せず、高校生ばかりでなく、地域貢献型の人材養成に対する県民の強いニーズがあること、教養担当教員

も含めて、地域課題や学際的な課題に対応できる専門教員がいたことなどが背景にはありました。

改組前、對島達雄教授（教育史、後に学部長）が中心になって学部改組の構想が練られていて、教育学研究室では頻繁に改組の検討を行っていました。その時に学部名称も話題になり、文化教育学部では「文化教育」を行う学部のようなイメージがあるため、「教育」や「文化」を対象とする学部として、「教育文化」の方が、語感も含めて良いように思うと、私が提案した記憶があります。学部名称の英文名は、文化の部分がcultureではなく、human studiesになっていることからすると、「教育人間科学部」という名称でもよかったのかもしれませんが、ただ、学部名称が長いのも避けたいところでした。また、私は新学部のカリキュラム作成を担当する委員として、学部共通科目の設定と、小中等の複数免許取得を可能にする学校教育課程のカリキュラム作成にあたりました。

教育学部時代、教員は、各教科などの単位に分かれた講座に所属していました。課程は学生の教育のための単位であり、教員は小学校の課程でも、中学校の課程でも、複数の課程で教育を行うことになります。学科の場合は、教員の組織と学生の組織が一致し、教員は基本的に自分が所属している学科の教育を担当します。

改組後も課程制ですので、課程・選修と講座は分離しても良いのですが、選修単位で講座を置くことにより、実質的に学科制と同じになるようにしました。その方が、学生と教員の対応関係が明確になり、教育に有効であるとかんがえられたからです。情報科学課程の責任体制があまりしかりしていなかったことの反省でもあります。

教科教育実践選修については、音美体を除く教科教育学の教員が所属する教科教育学講座と、音楽教育講座、美術教育講座、スポーツ・健康教育講座が担当します。学生は2年次になるときに教科選択をしていました。

改組の際、同時に、数学、物理、化学、地学、英語、情報の一部の教員が工学資源学部、医学部に異動します。1990年代始めから全国的に、教養教育が縮小され、教養教育を担当していた部局の解体や、新学部設立、担当教員の関連学部への分属などが行われました。教育学部時代の教員数は142名（1997年名簿）でしたが、これが改組後、120名（2003年名簿）になりました。

教育文化学部と同時に鉱山学部が工学資源学部に改組されました。本学部の学生定員の減少分は、主に工学資源学部に移動したことになります。

【文責：佐藤修司】

2019年度主な役職者等の紹介

◎執行部

学部長 佐藤修司
 副学部長（研究・地域連携・点検評価・広報担当） 林 良雄
 副学部長（教育・教員養成・財務・施設担当） 佐々木和貴
 教職高度化センター長（教職大学院担当） 佐藤 学
 附属学校園代表（附属学校園担当） 原 義彦
 学部長補佐（特命・幼稚園担当） 宇野 力
 学部長補佐（教員養成・附属担当） 鎌田 信
 学部長補佐（FD・IR担当） 小池孝範
 学部長補佐（地域連携・学生支援担当） 臼木智昭
 事務長 高橋尚之

地域連携委員長 林 良雄
 地域文化コアカリキュラム委員長 和泉 浩
 国際交流委員長 杜 威
 留学生委員長 杜 威
 広報委員長 林 良雄
 点検・評価委員長 林 良雄
 学生協議会議長 臼木智昭
 学生支援基金運営委員長 臼木智昭
 財務委員長 佐々木和貴
 施設利用計画検討委員長 佐々木和貴
 安全管理委員長 佐々木和貴
 情報システム管理委員長 佐々木重雄
 人事委員長 佐藤修司
 人権倫理委員長 佐藤修司

◎課程・学科・専攻・コース等

学校教育課程主任 星 宏人
 教育実践コース主任 三戸範之
 英語教育コース主任 佐々木雅子
 理数教育コース主任 河又邦彦
 特別支援教育コース主任 谷村佳則
 こども発達コース主任 細川和仁
 地域文化学科主任 大橋純一
 地域社会コース主任 池本 敦
 心理実践コース主任 柴田 健
 国際文化コース主任 辻野稔哉
 教職実践専攻長 佐藤 学
 学校マネジメントコース長 鎌田 信
 カリキュラム・授業開発コース長 田仲誠祐
 発達教育・特別支援教育コース長 藤井慶博
 心理教育実践専攻長・コース長 森 和彦

◎附属関係

附属幼稚園長 奥山順子
 附属小学校長 成田雅樹
 附属中学校長 原 義彦
 附属特別支援学校長 藤井慶博
 附属学校運営会議長 佐藤修司
 附属学校経営委員長 原 義彦
 附属学校学部共同委員長 藤井慶博
 附属学校子どもの人権委員長 鎌田 信

◎大学本部（本学部関係）

理事（教育・学生・地方創生・広報企画担当）・
 副学長 志立正知
 地方創生センター長 志立正知
 学生支援総合センター長 志立正知
 高大接続センター長 志立正知
 副学長（評価・IR担当） 上田晴彦
 評価・IRセンター長 上田晴彦
 学長補佐（地域協働・COC+担当） 臼木智昭
 地方創生センター副センター長 臼井智昭
 学長補佐（男女共同参画担当） 山名裕子
 教員免許状更新講習推進センター長 森 和彦
 同上 副センター長 山名裕子
 ハラスメント相談員 堀江さおり

◎各種委員会等

学部運営会議長 佐藤修司
 教育企画会議長 佐々木和貴
 学術研究推進会議長 林 良雄
 FD推進委員長 小池孝範
 入学試験委員長 長谷川章
 教務学生委員長 石井照久
 学務委員長 田仲誠祐
 キャリア委員長 篠原秀一
 教員養成委員長 佐々木和貴
 教職入門実施委員長 瀬尾知子
 教育実地研究実施委員長 吉澤恭子
 教育実習実施委員長 遠藤敏明
 介護等体験実施委員長 前原和明
 教職実践科目実施委員長 堀江さおり
 保育士養成実施委員長 未定

学生相談所専門相談員 柴田 健
 学生相談所相談員 堀江さおり
 武田 篤
 小野寺倫子
 中尾信一

2019年度を迎えて

教育文化学部長 佐藤 修司

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。また、新しく本学部・研究科に来られた教職員の方々、ともに本学部・研究科の未来を切り拓くため奮闘しましょう。

本学部・研究科の今年度の課題として、第一に教職大学院（教職実践専攻）の認証評価が挙げられます。専門職大学院は5年に1回、日本教員養成評価機構から評価を受け、教育内容や条件整備等の基準を満たしていることが認証されなければなりません。修士課程である心理教育実践専攻を含めて、魅力を高め、入学者の増加を図る必要があります。

第二に、学生・院生の就職先の保障・充実です。就職先の選択は自由なのですが、可能な限り秋田の教職、公務員、企業人として秋田を支えられるよう、就職・進路指導をさらに充実させなければなりません。秋田を離れるとしても、秋田やその地域に貢献できる「人財」になってほしいところです。

第三に、遠くない将来に予想される改組・改革に向けて準備することです。10年後だけでなく、20年先の秋田の人口動態、産業構造、地域の状況を予測しながら、それに対応できるだけの体制を整えていく必要があります。そのためには、とりわけ地域文化学科の教育・研究体制の強化が求められます。そして、選ばれる大学として、受験倍率3倍（前期日程）をできる限り維持できるように魅力を増していくこと、そのためには教育と研究、社会貢献の面でのさらなるパワーアップが必要です。

第四は、第三と重なりますが、大学を取り巻く状況が厳しくなる中で、秋田大学の中で、本学部・研究科の位置を高めていくこと、県内外での位置を高めていくことです。業績などが理系基準で測られることが多くなり、文系、教員養成系には厳しい時代となっています。文系の状況を理解しても

らう努力だけでなく、これまでの文系の枠を超えて、発展を目指すことも必要です。文系を中心としつつも、文理融合型（並列ではなく）の新しい学部のあり方を模索したいところです。また、国際化や、研究の活性化・高度化、教育の充実も重要です。

そして、第五に、実績を社会に向けて積極的に発信していく必要があります。昨年度は情報誌「みなおと」の毎月発行や、地域連携懇談会、教師力高度化フォーラム、心理実践フォーラム、シチズンシップ講座（カモンレク）、地域文化カフェ、国際文化カフェなどを行いました。今後も継続しながら、発展・拡大を目指します。

第六に、学生・院生の主体的な運営参加を実現することです。学生協議会の学生委員の方を軸にしながら、課程・学科、専攻、コースの枠を超えた一体的な意識形成を図りたいところです。ハラスメントも個別化、孤立化した関係の中で生じます。教職員も、学生・院生も協働的な関係を作りましょう。



秋田駅から見る夕日を浴びる太平山(3月18日)
今年も例年になく雪が少ない冬でした

発行 **秋田大学教育文化学部／教育学研究科**

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910年制作）を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。